

序論

本モノグラフは環太平洋地域、具体的にはユーラシア大陸東縁、南北アメリカ大陸太平洋岸、東南アジア島嶼部、そしてオセアニア地域において先住系集団が使っていた船について考察するものである。それらの多くは植物素材ないし獣皮素材を船体に使い、また推進力も人力（漕ぎ）、海流や川の流れ、そして風力に依存するものである。いわゆる接ぎ船の発明から急速に発展し、金属製の船にも至り、さらに推進力もエンジンになる以前の船である。すなわち、自然素材を使って、自然力で推進する船舶を本書では「舟」と称し、対象とするものである。

出ユーラシア人類集団はユーラシア大陸の東縁からアメリカ大陸、そして南下して東南アジア島嶼部からオセアニアへと進出した。まずオセアニアであるが、今から5, 6万年前の氷河期は海面が低下したために陸路でボルネオやジャワ島付近までは移動できた（スンダランド）。その先の島々は最大120mも海面が低下しても陸続きにならなかった。一方、さらにその先にはニューギニア島とオーストラリア大陸がひとつになったサフル大陸が存在する。ここには旧石器時代の遺跡があるので、人類はかならず渡海、あるいは外洋航海をしたはずである。

同じ事は日本列島にもいえる。神津島の黒曜石が海を越えて本州島付近にもたらされているからである。また人骨や遺跡の発見されている3万年前頃、琉球列島は陸続きではなく、この地に到達した人類はかならず海を渡ったのである（海部 2016, 2020）。

さらにアメリカ大陸へは、氷河期、陸となったベーリンジアを徒歩で渡ったといわれてきた。しかしベーリンジアやその先にあるカナダ北方地帯は陸といっても湿地であり、簡単に徒歩では移動できなかった可能性がある。民族事例からするとそのような場合は舟が有効なのである。

さらにアラスカに到達した最初的人类集団は北米を覆っていた氷河が縮小したときにできた回廊を通過して南下したと考えられてきた。しかし氷河回廊ができる以前の段階で、太平洋岸沿いに移動することができたという仮説が、太平洋岸のより古い遺跡の発見とともに唱えられるようになってきた（Engelbrecht and Seyfert 1994; Des Lauriers 2010; De Lauriers, Porcayo-Michelin and Davis 2020）。ユーラシア、たとえば日本列島付近から舟で移動したとは容易に考えられないが、すくなくともアメリカ大陸太平洋岸の移動は、人類移動の重要ルートであったことは間違いないだろう。では彼らはどのような舟を使ったのか、その点が大きな問題なのである。

そしてオセアニアへの移動は舟であることはまちがいない。オセアニアでは民族誌上、刳り舟を基本とした船体に補助輪的にアウトリガーを装着した、アウトリガー式カヌーが主流である。そのため、この地の研究の主対象はカヌーであった。本書でもその問題を第2部および第3部で追究するが、それに先立ち第1部では刳り舟・カヌー以外の可能性も追究する。

しかし旧石器時代、サフル大陸への移動時にはおそらくアウトリガーカヌーは考案されていなかった。またカヌー文化といわれるメラネシアやポリネシアでも、筏や草束舟が使われている意味を再検討する必要がある（Suder 1930; Schori 1959; 後藤 2006a）。

それと同時に、人類はそれぞれの居住地で、目的・用途に合わせ、コストパフォーマンスを考え、世代を超えて受け継いできた技術の中の選択肢から、多様な舟を作り得たというのが本書を書いて得た結論のひとつである。

さて本書は筆者のライフワークの一端として書いたものである。

ライフワークといっても筆者は一貫してこのテーマ、すなわち「舟」を追究してきたわけではない。筆者の研究を一言で表現すると海洋人類学である。近年書いた「研究の歩み」で詳しく述べたので詳細はそちらに譲るが（後藤 2022）、20代から30代にかけてのテーマは「舟」ではなく「漁具」であった。卒業論文、修士論文（いずれも東京大学）、および博士論文（ハワイ大学）のテーマは銚頭や釣針と遺跡から出土する魚骨などの分析であった。考古学資料の解釈のために民族誌も勉強したが、舟にはあまり関心がなかった。

そのような筆者が舟に関心をもつきっかけが2、3あった。

まず大きなきっかけは、沖縄国際海洋博覧会公園内にある海洋文化館のリニューアルの総監修を任されたことであった。2003年の冬に最初の話があり、この館の展示をリニューアルするための目玉はカヌーコレクションだと直感したことであった。その後、2013年の新展示完成まで、ヨーロッパやニュージーランド、あるいはアメリカ（ハワイのビショップ博物館）の博物館を巡り、オセアニアのカヌーコレクションを見て回ると同時に、古い文献に片っ端からあたった。19世紀末から20世紀初頭にかけて、オセアニアの一部を植民地化していたドイツの博物館資料やドイツ語の文献は圧巻かつ詳細であった。この間、ニューギニアやタヒチなどでも現地調査を行った。そして本書は、その過程で筆者が収集した文献をもとに書かれているため、海洋文化館の主要なカヌーコレクションの背景を知るための解説書の役割も果たすと考えている。

またこの期間に奈良の万葉古代学研究所から2年間の研究助成金をいただき、研究仲間と研究させて頂くことができた。その間、『万葉集』をはじめ日本の古典を舟研究の視点から読む機会があった。本書第3部にある舟の旅化粧や象徴性についての考察は、この研究途上で着想したものである。

さらに神奈川大学の国際常民文化研究機構が行った国際常民研究プロジェクトで私は「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」班の代表として2014年まで5年間、じっくり文献にあたり、考察を深めることができた。その成果は第1部および第2部の論文に含まれている。

また次の契機は、2013年頃に、国立科学博物館が企画した「3万年前の航海徹底再現プロジェクト」に参加したことである。当時、科博におられた海部陽介氏（現在は東京大学総合研究博物館）が、琉球列島へ最初に到来した人類は海を渡ったはずなので、当時可能だった舟を再現して本当に渡れるか実験しようと提案したものである。上記の流れで舟を研究してきた私は旧石器時代に作り得た舟を考案するという課題が与えられた。そこでそれまでオセアニアのカヌーを中心に見てきたが、それ以外の原初的な舟を本格的に研究するきっかけとなった。

そして本書は科学研究費新学術領域「出ユーラシアの統合的人類史学——文明創出メカニズムの解明」[19H05731]（松本直子代表）の計画研究A01班「人工的環境の構築と時空間認知の発達」[19H05732]（鶴見英成代表）への参加が出版のきっかけであった。ユーラシア大陸を出た人類集団はオセアニアの島々はもちろん、アメリカ大陸への移住も海ルートであった可能性が高まっている。その議論を進展させるための基礎資料を提供することが本書の大きな目的である。そして本書もこの科研の成果報告である。

本書は以上のような研究の流れの途上で書いてきた論文をもとに、全体に書き直したものである。本書の章と過去の論文との対応は以下ようになる。

第1部

第1章、第4章、第6章は書き下ろしである。なお第1章や第6章の基本的アイデアは2017「人類初期の舟技術——環太平洋地域を中心に」（『科学』67(9)、2017）や他（後藤 2014）で一部披露

している。

第2章、第3章、第5章は「環太平洋海域の原初的造船技術について：熱帯・亜熱帯域における船殻形成の概観」（『国際常民文化研究叢書5：環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究』、2014）のそれぞれ対応する章の加筆修正である。なお5章におけるフィリピンの筏の部分は「フィリピン・ルソン島イロコス州における伝統的船舶の考古学的民族誌ノート——バンカ型漁船と竹筏を中心に」（『現代社会フォーラム』2、2006b）の竹筏の部分の部分を挿入して加筆修正した。

第2部

第7章と第8章は「オセアニアのカヌー研究再考：学史の批判的検討と新たな課題」（『南山大学人類学研究所・研究論集』1、2013）の前半部と後半部を二つの章に分けて、加筆修正したものである。ただしこれらの章の議論には「オセアニア・カヌーの材質について：海洋文化館収蔵カヌー植物材質の射程」（『海洋文化に関する事業報告』、沖縄海洋博覧会記念公園管理財団、2010a）、および「カヌーにおける技術的選択について——ニューギニア東方海上部の資料を中心に」（黒沢浩・森部一編『南山大学人類学博物館所蔵民族資料の研究：タイ北部山地民の現在／パプアニューギニアの物質文化』、南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告書5、2011a）の議論も一部含まれている。

第9章は書き下ろしである。なお本章は2022年度南山大学 Pache-I-A-2助成金の成果でもある。

第10章は「海洋文化館収蔵ダブルカヌーの来歴について：タヒチ型ダブルカヌーの文化的および歴史的背景の考察」沖縄美ら島財団『海洋文化に関する事業報告』（2009a）の不必要な部分を削除した上、加筆修正した。

第11章は「フィリピン・ルソン島イロコス州における伝統的船舶の考古学的民族誌ノート——バンカ型漁船と竹筏を中心に」（『現代社会フォーラム』2、2006b）のバンカ型漁船の部分を加筆修正したものである。

第12章は「環太平洋海域の伝統的船舶技術の交流について——小笠原・八丈島のカヌー漁船を題材に」（『国際常民文化研究機構年報』1: 75-82、2010b）を加筆修正したものである。

第3部

第13章は「クラ交換の舞台裏——その物質文化的側面」（『物質文化』73、2002）、「船の旅化粧」（『万葉古代学研究所年報』9、2011b）、および後藤明・石村智「ショーテン諸島のアウトリガーカヌー：南山大学人類学博物館および沖縄海洋博公園海洋文化館の資料紹介」（『南山大学人類学博物館紀要』29、2011）などの一部を入れて書き直した。

第14章は「黒曜石の旅——民族誌に見るビスマルク諸島・ニューブリテン島産黒曜石の交易」（『東南アジア考古学』24、2004）、および「交易者の考古学的民族誌」（『考古学ジャーナル』529、2005）の一部を入れて書き直した。

第15章は「海彼世界への魂の旅：オーストロネシア（南島）語族における死者の島の諸相」（『万葉古代学研究所年報』6、2007b）、「オセアニア海洋民の魂の器としてのカヌー」（『アジア遊学』、128号、2009）などの一部を入れて書き直した。

第16章は書き下ろしである。

なお本モノグラフで使用する写真のうち、引用文献や提供者の記述のないものは、すべて筆者撮影である。